現代社会の光と影
――見えないものを見るために

真山 仁
（小説家）

熾烈な企業買収の世界を描いた小説『ハゲタカ』。主人公の鷲津政彦は外資系投資ファンドの社長で「ハゲタカ」と揶揄されバッシングを受けるような人物である。作者である真山仁に、ダークヒーローとも呼ばれるこのキャラクターの誕生秘話から、今の日本が抱える光と影、その影の部分をどう読み解くべきか、カルロス・ゴーン問題も含め広く話を聞いた。

『ハゲタカ』シリーズの主人公・鷲津政彦（わしづまさひこ）をどのような人物にするか考えたときに、思い浮かんだのがイギリスの作家ブライアン・フリーマントルのスパイ小説「チャーリー・マフィン」シリーズです。情報部員チャーリー・マフィンの活躍を描いた物語ですが、第一作『消されかけた男（原題Charlie Muffin）』（一九七七年）で、チャーリーはすでに四〇歳過ぎの中年、時代遅れの古風なスパイとして描かれています。古いタイプのスパイであるがゆえに、情報部内では厄介者扱いされ、もう彼には引退してもらいたいと思われている。見た目は目立たず、古ぼけた靴をはき続ける冴えない男です。しかし、周囲の期待とは裏腹にＣＩＡやＫＧＢ、時には身内であるＭＩ６を敵に回してさえ戦い、したたかに生き残っていきます。

単純な「正義のヒーロー」はつまらない

一見貧相なのに、実は凄腕の男が活躍する様子は痛快です。現実の世界でも、ソフトな見た目で、記憶に残らないような目立たない人が途方もない才能の持ち主であることは多い。鷲津もそのような人物にしようと決めました。外資系投資ファンドの社長といえば、金髪の西洋人や派手な身なりのやり手だろうという先入観を裏切る設定にしたのです。

『ハゲタカ』ではもう一つ、「現代の歌舞伎にしよう」と考えました。歌舞伎には〝悪の華〟や〝悪の光〟といった、悪を咲かせる、輝かせる独特の美意識があります。ニヒルで冷酷な二枚目の「色悪」や謀反を企てる「実悪」、公家の敵役は「公家悪」など、魅力的な「悪」がさまざまに登場し、なかには悪い奴しか出てこないような演目もあります。

『ハゲタカ』はバブル経済崩壊後の日本が舞台です。金融機関が駄目になり、国家が滅びるのではないか、というくらい深刻な状況になっても、それをチャンスと捉えて強欲に金儲けをする人が現実にはたくさんいました。一方で、倒産、自殺、持ち逃げのような暗い話も避けて通れません。エンターテインメントとして読者に届けるためには、歌舞伎のように登場人物のキャラクターを相当、振り切ったものにするとよいのではないかと考えました。「いい人はひとりもいない。全員、悪い奴にしよう」と。ただし、読者が納得できるように悪い奴なりに筋が通っているようにしました。登場人物のなかでも特に強烈な悪い奴である飯島亮介は、暗躍ばかりしていますが、彼にとっては組織＝銀行を守るためであったりするわけです。

私が生まれてはじめて読んだミステリーは『怪盗紳士』（モーリス・ルブラン著、一九〇七年）で、アルセーヌ・ルパンにはまりました。泥棒でありながら、強欲な貴族や政治家からは金品を盗むが、弱い人たちには力をかす義賊的な人物です。少年時代にルパンの格好よさに触れたことで、善悪を決めるのは人であり、立場が異なれば変わるし、白黒決められないことも多いと気づきました。そして「単純な『正義のヒーロー』はつまらない」と思ったのです。

「何が善で何が悪か」は簡単には決められないという考え方は、私のなかに深く根づいていて、鷲津ら登場人物に投影されています。

撮影＝幸田 森

正義、そして必要悪とは

鷲津は、公私ともにパートナーであるリン・ハットフォードに「俺は悪党じゃないさ。正義の味方だ。ただ、世間の正義と俺の正義が違うだけだ」と語ります。「正義」は主観的なものであり、戦争もお互いに「われに正義あり」と言って始めます。言葉にいくら大義名分を与えても、結局は自己弁護のために正義を振りかざしていることもあります。「正義」と声に出して言えば、みんなが自分についてくることをよく知っている人たちが正義を語るのです。国同士の交渉も同じで、それに長（た）けているのがアメリカで、日本はあまり上手くありません。勝者が正義で正しくて、敗者が悪となってしまうような状況も多い。

自分が犠牲になっても「絶対にこれは貫かなきゃいけない」という思いを体現している本当

この続きは本誌でどうぞ！